

ふれんどしっふ

1996年11月1日 発行
郡上八幡国際友好協会
総務部

楽しかった水餃子作り

和田 恭子

二人の中国人の方を講師に九月八日、本場のギョウザ作りが、相生の八幡福祉センターで開かれた。私もラーメン好きの下の娘と共に参加した。先生の紹介、材料の説明があつてすぐ作業に入った。二人の中国人先生が話す流暢な料理説明を聞く主婦の目も真剣だ。説明が終わるやいなや、役割分担しなくても、各々が早速手を動かした。トントントントン……手慣れた包丁さばきのリズムカルな音が響いた。山のようなニラの束をみじん切りする音。クラクラするような臭いには驚いた。強力粉と薄力粉をこねての皮



作り。耳たぶくらいのかたとつかわれても、これが仲々むつかしい。先生からは「これではかたすぎますね。もつともつとこねて」と指導。ねかした粉から皮づくり。先生の

手さばきは早い。くるくると回しながら、じょうずにめん棒を使って皮ができる。私にもやれる」とめん棒を手にしたが、どうもくるくるとはいかず変形した皮ができた。具を中にいれて形を作ることには、先生より手とり教えてもらったがうまくできず、自己流になつてしまった。まあ形は小さくままだであるが味に変わりはないしと湯の中に入れ、いよいよ試食。アツアツの水ギョウザをフーフー言いながら食べた。おいしい。おいしい。皮がずい分厚いのにその皮がおいしい。中味は肉よりニラがいつぱいで、とつてもヘルシーだ。最後に先生を囲んで記念写真。同じ町内に住んでも面識がない者どおしが、ギョウザ作りという共通の作業を通して、すっかりうちとけることができた。こんな企画をこれからも開いてほしい。

当協会では、七月と九月にそれぞれ短期間の国際交流事業を行ない何人かのご家庭でホストファミリーを受けていただきました。短期間であつてもそれぞれに得られたものは多かつたと聞いております。ここに、ホストを体験しての感想を記載させていただきます。

二回ホストファミリーを体験した

岩田 全市

十七年間の名古屋生活を止め、永住の地として、山の緑、清流、空気の美味さ、人の優しさのある郡上八幡に戻つて来ました。思い起こせば、郡上八幡は社会人となつて始めての着任地で第一印象として強く焼き付いていたのでしよう。

もつと郡上八幡に溶け込みたいと考えていた矢先に、町内の回覧板に綴じ込まれていた「ホストファミリーを体験してみませんか？」の一言が申込みのきっかけになりました。郡上八幡の良さを多くの人に知ってもらえればという単純な発想でしたが、いざ、お引受した後、だんだんと不安が高まってきました。なぜなら、中学校・高校での英語の授業経験しか無く、この二十年間、商売上のたばこの名

前である「CABIN」
「MILDSSEVEN」と言つた横文字ぐらいでしたので、今更ながら英会話を日頃からやっておけば良かったなという後悔の気持ちで一杯でした。不安のなかでお迎えしたのは、スウェーデンの大学で二十五歳の「カール」という男性でしたが、何と日本語が実に流暢ではないですか。彼曰く「日本語を勉強に来たのだから、日本語でお願いします。」との一言で家族一同ホッとしましたのは当然です。四日間とも100%日本語のホストファミリーで楽しい日々を過ごさせてもらいました。言語・宗教・文化・食習慣・商習慣・学校制度・観光地・郡上踊り等、また、動物の鳴き声の発声の違いなど、スウェーデンとの比較も含めてお話をしたのですが、あつという間の楽しい出来事でした。

の紹介、そして言語・宗教・食習慣の違い等、夜遅くまでお話ししました。結局、今回のインドの先生「アラス（二十九歳）」さんは全て片言の英会話？で通しました。片言の会話や身振り手振りで理解し合えた時のうれしさは当然です。一層身近な人に感じられました。

次の機会があつたら、すぐにお引き受けしようと思つていたら、第二段ーインドの先生方のお話をしたので、すぐに申し込みました。ところが、いざお迎えした時に今回は大変だなと思いましたが、それは、彼らが日本語が話せないレベルだったので。前回のスウェーデンの人と全く状況が違うのです。女房と思わず眼を合わせてしまいました。それでも何とかなるだろうと考えたのが幸いしました。人間の頭というのはかなり柔らかくできています。三十数年前の単語が切羽詰まった状況の中で、何とか出てくるではありませんか。家族・家屋

二回のホストファミリーを経験させていただいた素直な感想として、ボランティアという意識でなく、お互いに楽しめたという気持ちで一杯です。これからの機会があれば、お引受しようと考えています。まだホストファミリーを経験されていない皆様にも、是非お勧めしたい今年の夏の体験でした。

インド青年のホームステイをして

阪本 邦雄

役場前のロータリーにバスがゆつくり入ってくる。バスの窓ガラス越しに手を振るインド人特有の彫りの深い笑顔がいつぱい。なぜか、それまでの不安も一気に吹っ飛び手を振る。出迎えのホストファミリーの拍手が一斉に起る。これが、インド青年（理数科教師）と私たちホストファミリーとの出会いであつた。私の家にステイするのは、アヌパマ・スドという二十九才のミセス。それらしき人はと目で探すがさっぱり見当がつかない。突然、グリーンのパンジャミ・ドレス（パンツがペアーになったスーツ）をまとった女性がにこやかに近

付き手をのばしてきた。「ああ、彼女がスド」。感じがなんとなくタレントの富士真奈美に似ている。



車であつた。家族と挨拶を交わし、日本の家屋を知ってもらうために家の中をみてもらう。

リビングに家族八人が揃い、日本茶にようかんをつまみながら、和英辞典をかたわらに、インドに地図を広げてスドの住む町を探し、ワイワイ、ガヤガヤ。急速に雰囲気は和らいでゆく。ちなみにスドは、北部インドのシムラーという地方小都市に住んでおり、そこからはヒマラヤマウンテンが一望でき、すばらしい景観の土地であり、冬期には雪が降ることを教えられた。インドといえば、南方に位置する国・人口の多い国・ヒンズー教徒の多い国ぐらいたく彼女の住む町一つを探すとでインドに対する理解の甘さを認識した。世界地図を広げて、北部インドの緯度を日本にあてはめると沖繩から関東地方までが含まれるという

岐阜大学サマースクール in 郡上八幡

岐阜大学サマースクールに参加している留学生が七月十八日から二十二日まで八幡町を訪れました。スウェーデン、韓国、アメリカからの留学生計十三人です。

留学生は初日、町内の散策、茶道の体験をしました。礼儀作法や茶碗の回し方等を教わり、茶道愛好グループなどごみ会のご好意で野だての雰囲気味わいました。

又、友好協会が主催した歓迎会では、ホストファミリーと対面した後、協会員多数参加のもと交流を深めました。二日目は、草木染めでTシャツ、ハンカチを実際に染め、その色合いの変化に感激していました。三・四日目は、終日それぞれのホストファミリー宅でゆっくり交流を楽しみました。

広大な国ということ。恥ずかしいことだが、今まで、インドは亜熱帯から熱帯に位置する国であると認識していたからである。

レストランでの歓迎会を終え帰宅し、明日の過ごし方を話し合う。とにかく、一ヶ月の研修期間中八幡でのホームステイが日本の家庭を理解できる唯一の機会だということ、明日のランチはインド料理。夜は日本料理ときめ、午前中はフードショップを見学しながら材料を調達することとし一日目が終わった。

二日目の朝。「オハヨウゴザイマス」たどたどしいけれど、確かに日本語であいつ。昨夜話し合ったことを、変な英語とゼスチャーで確認。家族みんなが単語を思い出し話すのに四苦八苦。スドも一つ一つ、ゆっくりゆっくり話してくれる。よくしたものでどうにかこうにか意志は通じる。しかしえらいことの上ない。もっと早く英語の勉強

を始めたいれば……今になって後悔するが……

ランチに「たぎこみピラフ」その他に「ナム」も作ろうというところで、いよいよ料理教室の始まりだ。家内がマナイタを準備したが全く無視。左手にキャベツを持ち、右手に果物ナイフ。手前に引くようにして細かく削り取っていく。人参、たまねぎも同様だ。実に器用なものである。

「ナム」作りには、家族みんなが興味を持ち真剣に見学する。焼き上がった素朴な塩味の薄っぺらいパンにいためたキャベツを包んで出来上がり。実にうまい。大人も子供も取り合うぐらいにして食べた。数種類の香辛料を入れるのがうまさの秘けつか。そのうち「ナム」作りに挑戦したいと思う。

夜は、日本料理をといてどだが、彼女はヒンズー教徒であり、かつまたベジタリアンということもあり肉類、魚類は一切だめ。おいしい日本料理をととは思わなかった。

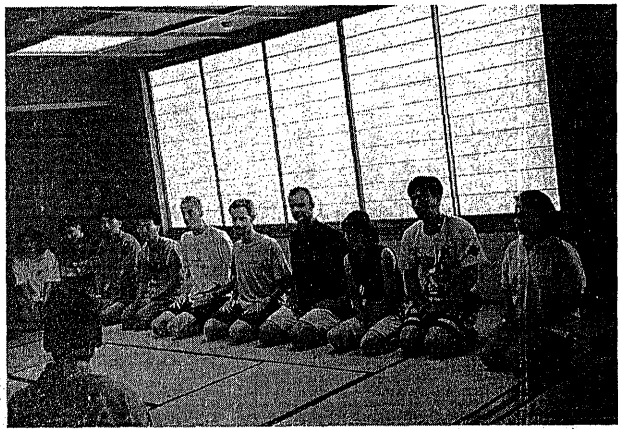
料理をととは思わなかったが、ダシにさえ肉、魚がだめだとなると大変である。

結局、ちらし寿司・野菜のてんぷら・果物という献立しかできなかった。でも、野菜はすべて獲れたての材料を使い、揚げたてのてんぷらを食べてもらったことが、せめてもの慰めと思っている。

スドの話によるとインド人の平均寿命は五十九才とのこと、こうした宗教による戒律の厳しさをも要因の一つなのだろうか。

こうして二泊三日のホームステイを終えて、インドに帰っていった彼女が高等学校の学生に、人々に、日本の国の何を伝えるのだろうか。日本人の何を伝えるのだろうか。ホストファミリーの一人として気になるところである。

今回はわずかに二泊三日という短いホストファミリーであったが、日本と歴史的に関係の深いインドの方との触れ合いが感謝している。



郡上八幡の皆さんへおめでとう

(夏期日本語講座卒業生より便りが届きました)



リード・シスン

アメリカ・ミシガン州の秋は、短かくすぐ寒い冬がやって来ます。郡上八幡最後の夏は、やはり暑い夏でした。三年前の夏、郡上八幡にやってきましたが、その暑さに驚きました。暑い夏から暑い夏へ三年が過ぎましたが、私にとつてあつと言つた三年間でした。

一九九三年に、郡上高校のAET(英語指導助手)として、文部省から派遣されましたが、実はその一年前の夏、大學生の時、郡上八幡国際友好協会の夏期日本語セミナーを受けるために、郡上八幡に来て左京のきねや(石田)さんで二ヶ月間ホームステイしながら、日本語を学びました。その時、美しい郡上八幡が大好きになり、アメリカの大学に戻り卒業してから文部省のJETプログラムに応募し、運

良く郡上高校のAETになることが出来ました。旧友とも再会出来、新しい友達も出来ました。郡上高校では、英会話の授業を担当しましたが、赴任当初何もわからない私に郡上高校の先生方は、日本の教育や英語の教え方について、丁寧に指導下さいました。議論を重ね、先生方と一緒に新しい英会話の授業を作ることが出来ました。今、郡上高校の生徒達は、より国際的な勉強が出来ていると思います。

三年前の私は、日本の文化についてよく理解出来ず、戸惑うことがたくさんありましたが、多くの人達に励まされ、またその人達から色々なことを学ぶことが出来ました。皆さんに心から感謝しています。三年間過ごした郡上八幡は私さとの郡上八幡に帰って来たかと思つています。その時はどうぞよろしく願っています。郡上八幡を心から愛しています。

岐阜大学中国人留学生と交流

八月十九日(月)岐阜大学中国人留学生四十名が八幡町を訪れ、協会員と交流しました。この事業は、民間ボランティア団体の中国学術交流センターが主催したもので、岐阜大学の中国人留学生会から、本年は郡上八幡を訪問したいという希望があり、現実化したものです。一行は備ミノグループと岩崎模型製造を見学し、その後八幡町防災センターにおいて友好協会主催による歓迎交流会を行いました。交流会では自己紹介の後「かわさき」「春駒」の踊りの手ほどきを熱心に受け、その後、町に出て町の散策・郡上踊りを楽しみました。

第四回 学習会を開催

去る八月十一日(日)国際交流に関する学習会が開催されました。南京教育文化国際交流中心副総経理の韓金龍先生(現在中京大学大学院在籍中)をお招きして、中国の文化についてお話いただきました。

韓先生の話で印象に残っているのは、世代によって考え方は大きく違い今の若者は、「向前看(理想に向かって)」というより、「向銭看(拝金主義)」となつてきていることでした。又、行政同士の交流は形だけのものになりがちだが、民間同士の交流は永続きするという指摘もありました。

郡上八幡の皆さん よろしく願います

英語指導助手 AET が交代



AETとして郡上高校で活躍されたド・シスンさん、八幡町の中学校で活躍されたアンバー・ジョンソンさんが帰国しました。かわりにマリアン・オーラーさんが来町されました。アメリカ合衆国アイダホ州出身の彼女は魅力的な女性です。みなさん、郡上八幡の皆さん、よろしく願います。